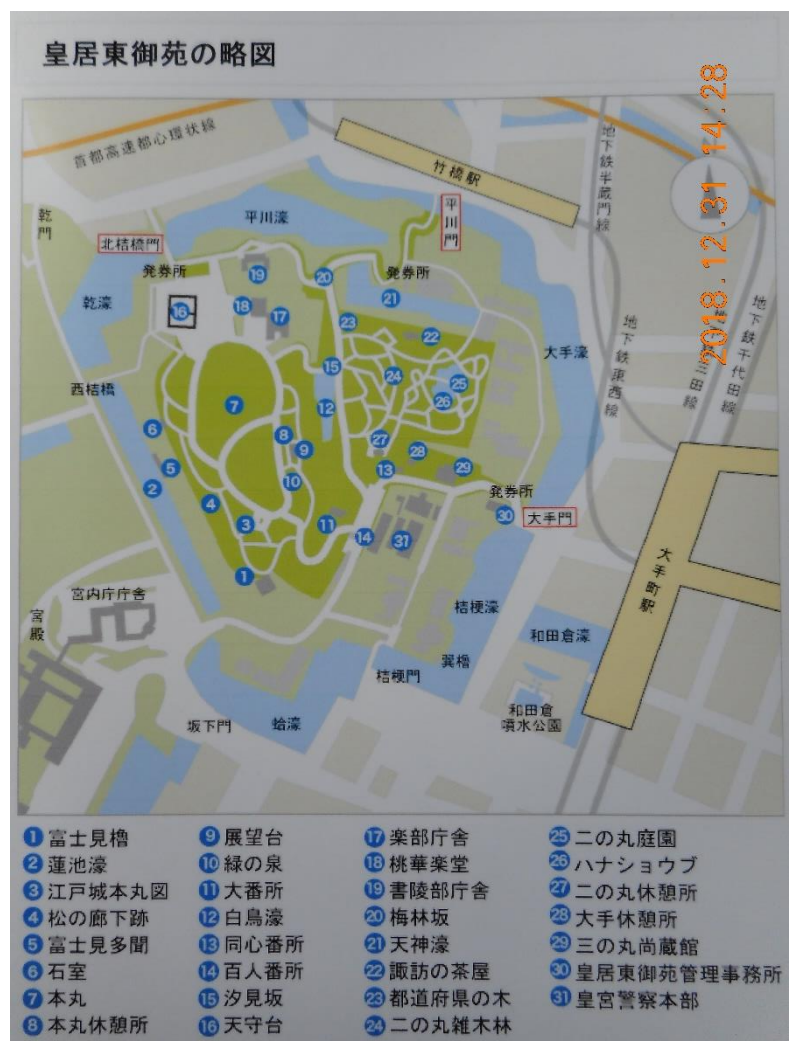


紅葉の皇居東御苑散策記

恵谷 浩

2018年12月3日(月)に山口大学文理学部物理同級生2名と皇居東御苑に久しぶりに出かけた。そのうちK.Y君は福岡県から4日前に東京在住の娘さんの所に奥様と一緒に来ており、残念ながらの枯紅葉の日光観光、最盛紅葉の皇居乾通り一般公開、さらに東京スカイツリーなど、東京観光をして、4日に福岡県へ帰ると言う。他の1名は東京都に在住のH.Y君。昨年8月の北アルプス・常念岳以来の再会となるK.Y君をどこに案内しようかとH.Y君と思案していたが、K.Y君は江戸城天守閣跡がある皇居東御苑を見学したことがないので是非とのこと。

11:30、見学場所が決っていなかったもので、都区内中心部の新宿に集合。JR中央線で東京駅へ。軽くラーメンで昼食後、歩いて大手門へ行き、手荷物検査を受ける。大手門は江戸城の正門で、諸大名はここから登城。さすが徳川将軍家、その規模は諸大名の城門をはるかに越え、巨大重厚。内側に同心番所がある大手三の門(跡)を抜けると、左手に百人番所、右手に中之門(跡)がある。中之門の石垣は江戸城最大級の35トン前後の巨石が使われており、瀬戸内海沿岸から運ばれた白い花崗岩が丁寧に加工され隙間なく積まれている。今年、桜の季節に歩き遍路をした小豆島にも大きな石切場があったが、当時天領・江戸幕府直轄地であり、小豆島からも運ばれたという。右手には大番所もある。番所とは警備員の詰所のことで、同心番所には与力・同心が勤め、百人番所は長さ50mを越える詰所で、鉄砲組百人組と呼ばれた根来組・伊賀組・甲賀組・廿五騎組の4組が交代で詰め、各組とも与力20人、同心100人が配置され、昼夜警護に当たっていた。さらに、江戸城本丸への最後の番所として大番所があり、他の番所よりも位の高い与力・同心が警護していたという。坂道を上り、左に折れ進むと、本丸南端の所に富士見



皇居東御苑の略図

櫓がある。石垣の高さが約 15m、櫓の高さは約 16mの三重で、明暦 3 年（1657 年）の大火で天守閣が焼け落ちた後はその代役をしたと伝えられている。



13:27 百人番所



13:32 大番所



13:33 中之門の石垣(右)と大番所(左)



13:44 富士見櫓



13:43 富士見櫓を背にする筆者

現在、ヤブツバキやキチジョウソウの花が咲いている野草の島、カブスの実がなり、柿や柑橘類が植えられている果樹古品種園を通過して、13:47 松之大廊下跡。時は元禄 15 年（1702 年）12 月 15 日、大石内蔵助以下 47 名の義士が吉良邸に討入りみごと本懐を遂げた忠臣蔵として昔は講談師が扇子をトントンとたたき、現在では何度も映画・テレビ化され、12 月になるとよくテレビ放映される事件の発端となった松の廊下は、本丸大広間と将軍との対面所である白書院を結ぶ L 字形の廊下で、西へ約 19m、北へ約 31m、幅が約 5mもあったとのこと。今は木立となり、廊下跡として碑がひっそりとあるのみ。さらに進むと広大な平地に芝生が広がっている江戸城本丸跡。本丸は、表・中奥・大奥の三つの建物群から成っていたことを示す平面図が掲げてあった。表は諸役人の執務や将軍の謁

見の場などがあり、中奥は将軍の私的な居住地で小姓など男性だけが仕えており、大奥は将軍の正室すなわち御台所や何人かの側室が住み、総勢約 3 千人もの女性がかしずいていたという。また、大奥と中奥は御鈴廊下で結ばれ、大奥に入れる男性は将軍のみ。本丸跡は眺めただけで茶畑を上がり、富士見多聞へ。多聞とは長屋造りの鉄砲や弓矢などの武具庫で、本丸には 15 棟有ったが、現在残っているのはこの富士見多聞のみとのこと。内部が 2016 年より公開されており、以前 2 回程東御苑を訪れたことのある筆者も初めて見学した。細長い窓が並んでおり、迫りくる敵兵を迎え撃つためだったのだろう。ガラス板越しの窓からようやく蓮池濠と対岸が望まれた。蓮池濠沿いに歩き、13:52、火災などの際に貴重品などを移した蔵と考えられている石室へ。さらに、竹林を進むと、いよいよ天守台（天守閣の櫓がそびえていた石垣）の前。



13:46 野草の島



13:47 松之大廊下跡の碑



13:53 富士見多聞からの眺め



13:56 紅葉下の道を歩く



13:59 石室



14:01 竹林の道

休日でもないのにアジア系・欧米からを含む多くの観光客が東御苑の何所からともなく集まり、天守の石垣への道はロープで上り・下りに分けられている。以前来たときは、道の仕切りなどなくて、数人があちらこちらだったのに。天守は徳川家康によって慶長 11 年（1606 年）に富士見多聞の辺りに建てられたが、その後 2 代秀忠、3 代家光と将軍の代替わりごとに、現在の天守の石垣の位置で築き直され、特段の役割はなくて、将軍の権力の象徴であったという。天守は高さが石垣を含め 60 m 近くもあり、その構造は 5 重 5 階建て日本最大級で、天気良ければ房総半島まで見ることが出

来たといわれているが、明暦の大火で焼け落ち、翌年に高さ 18mの石垣が花崗岩で築かれた。しかし、徳川幕府の世は盤石となり権力象徴の必要がうすれ、無駄な出費を止める意味からも、その後再建されることはなかったという。現在、東西 41m、南北 45m、高さ 11mの石積が残っている。さすがに天守の石垣の上からは遠くのビル群もよく望める。石垣の上で 3 名そろって記念写真を撮ってもらった後、本丸跡の横の道を通り汐見坂を下り、雑木林から二の丸庭園・二の丸跡へ。



14:03 天守への上り口



14:04 天守の石垣



14:08 天守石垣の上からの眺望



14:11 天守石垣の上にて



14:18 汐見坂を下る



14:19 汐見坂から白鳥濠を望む

二の丸は 3 代将軍家光のとき、寛永 13 年（1636 年）に建てられ庭園も造成された。二の丸は将軍の隠居所、将軍生母の住居場所、前将軍の側室が晩年を過ごした場所でもあったが、何度も焼失と再建を繰り返し、慶応 3 年（1867 年）の焼失後、再建されることはなかったという。また、現在の庭園は昭和 39 年（1964 年）に庭絵図面をもとに復元された。二の丸池を配した紅葉の名園を堪能。ただ、ベトナム鯉の金魚もどきの長い手・尾などのひれには違和感を覚えた。いかなる経緯があるに

せよ皇居・江戸の庭園には日本の鯉がふさわしい。日本の伝統を重んじて欲しいものである。さらに、11代将軍家斉のとき創建され、明治45年（1912年）に再建されて吹上御苑にあったが、昭和43年（1963年）に移築された諏訪の茶屋を眺めた後、都道府県の木を通り、梅の老木が多数ある梅林坂を少し下る。江戸城三の丸の正門だったが、死者や罪人を運び出す門でもあり、赤穂の浅野内匠頭が松の廊下で、即刻罪人となり送り出された平川門の近くまで歩き、有事のときには橋が跳ね上がる仕組みになっていた北桔橋（きたはねばし）門を渡って、15:16 皇居東御苑を後にした。



14:24 紅葉の二の丸庭園



14:24 二の丸庭園の池



14:28 二の丸庭園・池



14:28 二の丸庭園の池



14:29 ベトナム鯉



14:32 二の丸池に注ぐ滝



15:08 諏訪の茶屋



15:10 梅林坂



15:16 北桔橋門

近くの地下鉄駅への道として、現在では首都高速都心環状線が走り、桜の名所千鳥ヶ淵や牛ヶ淵、清水濠に囲まれ北の丸公園となっている所に入った。日本武道館の道路反対側は今年も立派な大イチョウが見ごろ。田安門から公園を出ると、橋の両側にはよく花見のときに来る桜の木が来年の春への

備えとなっていた。



15:31 武道館と大イチョウ



15:34 丸の内公園内から望む田安門



15:35 公園外から田安門を振り返る

坂道を歩いて地下鉄九段下駅へ。飯田橋駅で JR に乗換え、両国駅下車。駅前直ぐに大相撲の両国国技館。K.Y 君、筆者も両国駅下車は初めて、さすが本場・ちゃんこ鍋屋が軒を連ねており、思わずおーと感嘆の声。ちゃんこ鍋を頼み、ジョッキビールで乾杯。ただし、K.Y 君は昨年秋からの悪性リンパ腫で入院、6 月に退院したが大事を取りノンアルコール。友遠方より来る、久しぶりの 3 名で話がはずむ。しかし、その内容は筆者の新年早々の強烈なめまいでの救急搬送、長年の膝関節軟骨摩耗、頸椎症性頸髄症、ひどくなる母指反転、H.Y 君の食べても痩せ、K.Y 君の身体に力が入らず太り、さらに筆者の耳鳴りの話に両君とも自分も生じるようになった、などなど共通の話題は寄る年波のことで盛り上がり。また、あれ程よく一緒に近隣の山登りに行っていた同級生の N.Y 君のこと。胃ガン手術の後、元気に過ごしているようだが、詳しい生活の様子が分からず心配。ビールは一杯しか飲めず、ちゃんこの追加不要で 1 人 4500 円と安上がり。歳を取ってよいこともある。健康第一に過し、来年こそは無理のない、易しいコースを探し日本アルプスなど高山への登山を再開出来ることを約して、帰宅の途についた。